

学生から学ぶ教員への期待

安河内, 朗
前芸術工学研究院長 | 九州大学芸術工学研究院

<https://doi.org/10.15017/1912797>

出版情報 : 基幹教育紀要. 4, pp. 5-6, 2018-03-23. 九州大学基幹教育院
バージョン :
権利関係 :

学生から学ぶ教員への期待

安河内 朗

前芸術工学研究院長, 九州大学芸術工学研究院, 〒815-8540 福岡市南区塩原 4-9-1

Implication of learning from students

Akira Yasukouchi

Former Dean, Faculty of Design, 4-9-1, Shiobaru, Minami-ku, Fukuoka 815-8540, Japan

*E-mail: yasukouc@design.kyushu-u.ac.jp

基幹教育を受けられる学生が羨ましい。九州大学の新生にとつてここでの受講は義務であるが、そう思ってしまえば価値が薄れてもったいない。まずは学生にこの価値を理解させる必要がある。以下は学生に対するこの理解の助けになればという記述であるが、見方によっては教員にもいえることとして頂ければ幸いである。

新たな知や技をもって問題を解決する能力は、私の学生時代でも求められてきたことである。しかし時代が違う。私たちの学生の頃は何を解決すべきか対象が最初からあらわれていた。またその問題もある専門分野の中で解決できるものが多かった。しかし今は、問題の規模が飛躍的に大きくなり、その複雑さも多次元的な広がりを持ち、もはや多くの専門家や組織を糾合して対応せざるを得なくなった。なによりも、何が問題として浮上してくるのか、そのものが見えない課題が対象とされる。科学技術の革新的変化や価値観が大きく変わる中で、それはイノベーションの名の下にさらに拍車がかかっている。このような時代で人類のしあわせや福祉とは何かを問い、その解決と実現を担うこれからの若者は、まさに「ものの見方・考え方・学び方」を改める必要がある。基幹教育はこのために全国に先駆けて始まった。九大卒業生のさらなる活躍の如何は、1年生からの取り組みの姿勢にかかっている。

複雑極まりない社会で、今あるいは近未来で何が問題になるかを適切に見出すには、まずは「ものの見方」、まわりの世界のとらえ方が重要になる。

自身の行動を考えると、まずは五感で身の回りの世界を感得し、自身の内部状況と照合しつつ生物的・社会的価値評価にもとづいて行動をとる。ここで「ものの見方」は五感による感得力がもともになるが、眼で見て耳で聴いてといった類ではなく、脳で五感の情報が一体となって見る、聞くことになる。この一体化によって脳における世界が構築される。しかし、本人の生育環境にある常識という枠や本人のそのときの関心事によって五つの感覚情報の取捨選択や組み立て方が変わり、世界の構築も変わる。つまり、本人はありのままの世界を見ているつもりでも、おそらくそこにいる10人の感得世界は十色であろう。同じ犬の鳴き声を聞いても日本人にはワンワンに、アメリカ人にはbow wowにしか聞こえない。音の物理特性は同じなのに。思い込みがそうさせる。同じ道を

通っても通勤時と日曜の散歩で、見える世界が違うのは関心事の違いからである。このような「ものの見方」は感性の問題といえる。感覚の組み立てによる、ありのままでない世界の再構築は避けられない。できるだけ、常識という枠組みや余計な関心事を取り払ってニュートラルにもものを見ようとする態度が必要である。だからこそ、価値観や考え方の異なる人たちとのコミュニケーション能力が問われる。それぞれが異なる感得力、異なるものの見方をしている他者と如何に意志の疎通をはかり、自分なりの見方をニュートラルにできるか、専門性はもちろん文化を越えた会話能力が求められる。思い込みや関心事のバイアスは高年次になって専門性が深まるほど強まる。だから1年次の基幹教育は重要である。

私は感性と理性は対をなすものではなく、感性を基本として理性があると思っている。私の専門は生理人類学で、科学の分野に入る。科学としての実験の4つのプロセスを例にとると、まずは新たな問題を見つけるために事実の観察（文献の調査でもいい）から始まる。ここではありのままを正確に見る必要があり、そこから有用と思われる事実を抽出する。この観察能力は主に感性に依存する。次に抽出された一見雑多な事実をどのように構想して仮説化するか、この能力は理性といえるが、事実の組み立て方には感性も介在する。とはいえ、これは自分が勝手にたてた構想なので、ここから3つ目のプロセスとして実験をする。仮説が正しいか、然るべき実験計画によって得られた事実（データ）をもとに検証する。ここでもどんな実験計画で何を測定項目として選択するかも感性が働く。最後の4つ目で、仮説が正しかったかどうかデータや文献から議論をして正しければ理論として一般化する。実験で得られたデータは事実であるが、これらの事実から検証にいたるプロセスにも感性と理性が混在する。総じて、感性が理性のベースをつくることになる、というのが私の考え方である。この感性を磨く場が基幹教育になる。

このような「ものの見方」、「考え方」を鍛えれば、自然に「学び方」も備わってくる。私はデザインを教育する部局に所属する。デザインに求められるのは、まさに「ものの見方」を通して課題を抽出し、その解決に向けてさまざまなアイデアを発散・収束させ、そこからいくつかの提案に結びつけて視覚化（プロトタイピング）していくことである。そして、このプロセスをマニュアル化したのがデザイン思考である。この手法を用いた商品がヒットしたことから、近年イノベーションの創出にデザイン思考が注目されるようになった。ここで重要なのは一専門家が先に技術ありきで想定する課題ではなく、生活者や異なる専門家を交えてお互いが気づかない日常の潜在的課題までも抽出することである。またここから課題解決に向けたアイデアをプロトタイピングしては何度も繰り返す。つまり、敢えて失敗を何度も繰り返しつつ、最終提案にいたる。まさにデザイン思考には、健全な感得力やコミュニケーション力が求められる。基幹教育には“デザイン思考”をテーマにした科目が準備されているのはご承知の通りである。知識は身に付けるもの智慧は出すもの、基幹教育は智慧の出し方を訓練する場でもある。

さて長々と学生への基幹教育の理解を促すつもりで述べてきたが、それはそっくり教員側にもいえることである。準備された授業科目で学生がどのように趣旨を学びとっているかを観察しつつ、既成の枠組みを取り払い、教育に対する「ものの見方・考え方」を問い直し、様々な個性や夢をもつ学生にどのように接し、また教育の何を改善すべきか、常に問い直しチャレンジする必要がある。われわれ教員には学生よりはるかに強い思い込みや関心事がありそうだから。